

かずさの博物誌

ホオアカ

～ほほが赤いまれな冬鳥～

文・写真／成田篤彦



▲ホオアカ スズメ目ホオジロ科
全長16cm。冬鳥。千葉県指定要保護生物＝2010年3月3日 木更津市(成田篤彦撮影)

頭の色が灰色にみえる小鳥がいた。「ヒバリとは違うな？」と思って双眼鏡でのぞくが、草がさえぎって頭だけしか見えない。そのとき、スズメより小さな鳥がマリを投げたように水田の上を飛び、用水の岸辺の茂みの中に入り込んだ。しかし、どこにいいのか肉眼では全く分からない。双眼鏡で観察すると用水のセメントの護岸の上に止まっていた。ほほの紅色の境がはっきりしていて、胸に茶色と黒の二本の横帯がある。ホオアカだ。やつと見つけた。それにしても

この冬、「ホオアカが海辺近くの湿田にいる。」と友人が教えてくれた。「え！そうですか？」とびっくりした。何度も湿田を訪れているのに全く気がつかなかった。
ホオアカは、若いころ、夏に尾瀬ヶ原で初めて見た。尾瀬ヶ原にはニッコウキスゲの橙色の花が一面に咲いていた。その花の先端につかまっていた盛んにさえずっていた。姿や鳴き声はホオジロととてもよく似ていた。しかし、鳴き声はホオジロのような鋭いキンキンした声ではなく、短く、口ごもっている。大きさはスズメよりやや大きくホオジロより少し小さ

い。この時は思いのほか近づくことができ、ほほ(頬)の口紅のような赤色も肉眼ではつきり見えた。しかし、低く飛んで近くの枯れ枝に止まり、さえずったと思うとすぐに飛び立ちまたさえずる。それを何度も繰り返して遠ざかって行った。あたかも広い尾瀬ヶ原の上をゴルフボール大の赤褐色の毛糸の玉が低く弾んでいるように見えた。
もし、かずさで出会えれば約四十年ぶり。しかも、冬羽のホオアカは初めて。早速、翌日に行ってみた。
双眼鏡で農道や畦の草むらを丁寧に探した。草地から頭が見えるスズメより少し大きな小鳥がいた。地面の色とそっくりで、肉眼では鳥がいるかどうか分からない。ときどき頭の毛を逆立てる。ヒバリだ。ヒバリはあちこちの畦に二、三羽の群れで地面をついばんでいた。舗装道路脇の草むらでも二羽、餌をついばんでいた。その先に、ややほっそりした小鳥が一羽いた。首を伸ばしてこちらを見ている。撮影してカメラの液晶画面で見るとほほが赤褐色。ホオアカか？と思ったが、はつきり分からない。また、遠くの右側の畦に

初めて。早速、翌日に行ってみた。双眼鏡で農道や畦の草むらを丁寧に探した。草地から頭が見えるスズメより少し大きな小鳥がいた。地面の色とそっくりで、肉眼では鳥がいるかどうか分からない。ときどき頭の毛を逆立てる。ヒバリだ。ヒバリはあちこちの畦に二、三羽の群れで地面をついばんでいた。舗装道路脇の草むらでも二羽、餌をついばんでいた。その先に、ややほっそりした小鳥が一羽いた。首を伸ばしてこちらを見ている。撮影してカメラの液晶画面で見るとほほが赤褐色。ホオアカか？と思ったが、はつきり分からない。また、遠くの右側の畦に

かつて、夏に見たときよりもずっと色が淡く地味で、周辺の枯れた草木の茂みの色に見事に溶け込んでいた。パソコンで見ても写っているはずなのに、画面の中央を拡大してやると分かる。これでは何度も湿田を訪れても気がつかないはずだ。彼らの自然に調和する巧妙さには今改めて感服する。
ホオアカは身近にいるホオジロと比較すると小さい上に、群れにもならない。孤独で女性的な小鳥である。ちなみに、ホオジロの古名は「しし」といい後に鴉(ししと)となった。意味は巫鳥(みこどり：巫女が鳥の動きから占った)という。ホオアカの古名は赤鴉(あかししど)と呼ばれていた(風信子著2008『俳句と詩歌であるく鳥のくに』文一総合出版)。



◎成田篤彦

▶ホオジロの雄 スズメ目ホオジロ科
全長16.5cm。上総に周年生息する。
||2008年7月17日 袖ヶ浦市(成田篤彦撮影)

ところで、ホオアカは夏、高原の草地の地上や低木の枝に椀形の巣を作り繁殖する。冬は平地に移動し、本州中部以南の休耕田や畑などの開けた草地でふつうに越冬するが、県内での越冬数は少ない。また、北部のほんの一部の地域で繁殖するものがある。いずれにせよ上総の冬にひっそりと過ごしている彼らの生活を脅かせないようにしたいものだ。

参考文献

- 千葉県の自然誌本編6
- 千葉県レッドリスト
- 2006年改訂版